ダイバーシティ事業　国際人事交流プログラム（派遣）
ダイバーシティマネジメント報告書

報告日：2020年3月1日

派遣者所属名	大学院経済学研究科
派遣者氏名	橋野知子
調査対象機関名 （派遣機関含む）	リヨン第二大学（Université Lumière Lyon 2） Laboratoire de recherche historique Rhône-Alpes（略称　LAHHRA） 受入教員の所属はUnite de Foundation et de recherché　'Temps et territories'

調査項目

・役員数（10人）うち女性役員数（5人）　　※左はVice Presidentの数。Presidentは女性。

・教員数（936人）うち女性教員数（495人）　※リヨン第二大学全体（契約・任期付き含む）

・教授数（651人）うち女性教授数（338人）　※「教授」は教授相当職（ProfesseurとMaître）

（出所：*Bilan Social de l' Université Lumière Lyon 2 2018* による）

① <u>派遣先機関のジェンダー平等やダイバーシティに関する教育プログラムの実施状況について</u>

・共同研究者のPierre Vernus先生が、学部の歴史の講義で、「ジェンダーの歴史は女性に限らず、人間の歴史となるべき」であるという講義を行っている。

・LAHHRAのManuela Maltini先生が中心となって、ジェンダー教育を専門とする2年間のマスタープログラムを展開している。このプログラムは国際的であり、ヨーロッパ各国から多くの学生を集めている。

・大学のHPで、Mission <<égalité entre les homes et les femmes>>と題し、男女平等の重要性を学生やスタッフに呼びかける活動を積極的にしている。

② <u>研究室運営におけるジェンダー配慮の状況等について</u>

・Vice Presidentの一人であるJim Walker先生と、大学におけるジェンダーについて意見交換する機会を得た。率直に、フランスの大学にはジェンダー配慮の伝統と歴史があると感じた。言い換えれば、そのような歴史と伝統を意識して作ってきたのである。またWalker先生によると、ジョブセミナー等雇用・採用にかかわるコミティーは、男女比率を必ず50:50にするようにして、公平な判断ができるようにしているとのことである。

③ <u>上記に加えて気づいた点</u>

・特別なことをしていると言うよりは、ウエブサイト等で男女平等やダイバーシティの重要性に関して、啓蒙を不断に呼びかけ、そしてそのことを通じでスタッフもそれが当然のことであると認識している様子であった。

・第一は、所属していたところが、人文科学という分野だったこともあり受入教員の所属する人文科学系の九つの大学・研究所が集まる研究ユニット（LARHRA。実質、私はここのオフィスを借り、ここで共同研究ならびに研究報告をした）だったこともあり、女性が多く目立った。しかも大変元気であった。大学院生の頃から、男性の多い経済学という分野で仕事をしてきた私にとっては、新鮮な雰囲気を感じた。

・上記の通り、借りたオフィスが人文科学系のさまざまなUnite（ユニットと彼（女）らは言う）が混在した建物で、分野間の交流を図っていた。
・建物が、旧陸軍の病院（19世紀のもの）をリノベートして使っており、オフィスあたり面積が神大に比べてきわめて小さい。そのオフィスを2人で利用しているケースもある。その際も男女別にするようなことはしていない。
・興味深かったのは、トイレである。学部の学生用の建物は、トイレは男女別になっているが、研究棟は男女一緒である（ただし建物の入り口のセキュリティーは厳しい）。トイレの入り口は一つ、中にはいわゆる女子トイレが二つあり、男性・女性のマークがそれぞれ示されている。特に違和感を抱いたことはないという（Vernus先生による）。私は現在、兼松記念館の3Fにオフィスをいただいているが、女子トイレは1Fにしかない。オフィスの目の前には、男子トイレがある。1Fまで行っても混んでいて、そのまま帰ってくることもある。仕事が忙しくてトイレを2－3時間我慢するのは、日常的である（私の部局の事務の女性からも、トイレが遠くにあるので我慢してしまうことが多い、という声を聞いたことがある）。所属する部局に、目の前の男子トイレを「女子使用中」等の目印を出して使わせて欲しい旨をだいぶ前に申し出たが、部局より上のレベルで禁じられているとの回答であった。長期的に、体調に影響がでないか心配である。スペースがないならないなりの工夫が必要である。思えば、先の回答も男性優位の考え方であった。女性が増えないと変わらないのかもしれないが、まずは先に変わることが必要である。